

使徒パウロは、第3回伝道旅行の主な使命を終えて、今、エルサレムに帰るために旅を続けている。ミレトスにおけるエフェソの長老たちとの涙の別れの後、パウロ一行は島々を經由してパトラに着いた。今までは沿岸航行の比較的小さな船であったが、今度は、このパトラで地中海を横断する大きな船に乗り換えたのである。船旅を続けて五日後にティルス（ツロ）の港に着いた。そこで積み荷が陸揚げされることになっていたのに、七日間そこに滞在することになった。それが思わぬ休息の時となった。

ティルスにはすでに以前からキリスト者の群れがあった。パウロ一行はそこに七日間滞在し、初対面ながら彼らと素晴らしい交わりの時を持った。ルカはその時の別れの情景をこう記している。「滞在期間が過ぎたとき、私たちはそこを去って旅を続けることにした。彼らは皆、妻や子供を連れて、町外れまで見送りに来てくれた。そして、共に浜辺にひざまずいて祈り、互いに別れの挨拶を交わし、私たちは船に乗り込み、彼らは自分の家に戻って行った」（21:5、6）

出船の別れはいつでも情感溢れるものであるが、パウロを見送る一団のクリスチャンたちのこの祈りの情景は、ミレトスにおけるエフェソの長老たちとの別れの情景とともに、感動を呼ぶ一駒である。彼らは、エルサレムでパウロを待ち受けている危険のことを考えて、神の守りと切々と祈ったと思われる。その祈りは非常に熱烈だったと思う。涙の祈りだったと思う。

私たちはここで一つのことを注目したい。それは、初代教会の信徒たちの印象深い祈りの姿である。すでに見たように、エフェソの長老たちはパウロと共にひざまずき、涙を流して祈った（20:36）。ティルスの信徒たちは、パウロを取り囲み、海岸にひざまずいて祈った。妻子を引き連れて家族ぐるみで祈った。彼らの祈りは生活に染み付いていた。体に染み付いていた。

喜びにつけ、悲しみにつけ、祈りが自然に出て来る。その心がいつでも神に向かう。そして神に向かって祈り、叫ぶ。私たちに足りないのは、このような祈りではないかと思う。生活の中で何かが起こる、悲しいこと、嬉しいことが起る、一喜一憂するだけで、神様への祈りが口から出て来ない。祈りが生活に染み付いていない。体にしみついていない。

クリスチャン生活の中心は、神との交わり、すなわち祈りであるが、その祈りがない。祈りがないということは、言葉を借りて言えば、私たちはまだ「神なしで、自力で生きている」ことを意味する。自分では信仰をもって生きていると思っているが、実際は、自分の力で一所懸命に生きている、信仰の中に神様がない。それ故信仰生活に力がない。喜びがない。

今日、この祈りのことを真剣に考えたい。自分の信仰生活を振り返って、果たして自分は本当に祈って来たか、会話のない夫婦のように神との会話のない信仰生活を送って来なかったか、考えてみよう。生活の唯中で、神をもっと身近な存在として感じ、日々神と語り合いつつ共に歩む、日々神を見上げて生きる—これが祈りであること覚えたいと思う。そのような祈りの人になりたいと思う。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなた方に望んでおられることである」（第1テサロニケ 5:16~18）。